

場所 北海道士別市

面積 707ha

活動目的 士別試験場では、重要種の保全、地域在来種を主体とした生態系の維持、地域住民への取り組みの理解促進や自然の豊かさや生物多様性に対する関心・意識向上を目的に①重要種の保全、②外来種の駆除、③地域連携イベントの3つの取り組みを実施している。



サイト概要 サイトは、士別市西方に広がる温根別丘陵に囲まれた砂礫台地、扇状地性低地からなる温根別低地に位置する。標高は150から260mほどで敷地西側の斜面には、自然林のミズナラ-シナノキ群落が多く分布し、尾根部にはトドマツ-ミズナラ群落、谷部の湿性な場所には小面積ながらハルニレ-ヤチダモ群落、オノエヤナギ群落が分布している。また、斜面下部にはカラマツ植林、耕作地等の跡地にはシラカンバの高木林や低木林、ススキ等の草地が分布している。樹林環境にはハチクマやカタクリ、草地環境にはオオジシギやホオアカ、ため池のような水辺環境にはエゾサンショウウオやタヌキモのほか、敷地内を流れる河川ではサクラマスの上流が確認され、貴重な動植物の生育・生息場所となっている。

土地利用の 変遷

敷地の半数ほどは低地環境であり、以前は畑地や水田、牧草地と住宅などがみられた。このうち、テストコースの造成が行われなかった場所では二次遷移が進み、現在はシラカンバ群落が形成されている。また、敷地中央から北側半分はシラカンバ-ササ群落やトドマツ植林などの樹林が分布していた。現在も当時の樹林の多くが敷地西側の丘陵地や周回路内側に残されている。敷地南西側の丘陵地は、造成も少なく以前からの自然度の高い樹林環境が残されている。

サイト周辺の 環境

平地は主に畑地や水田環境で丘陵地から山地は樹林環境となっている。周辺の樹林環境は、北東部はカラマツ植林やトドマツ植林などの人工林、南部はシラカンバ-ミズナラ群落などの二次林となっているが、トドマツ-ミズナラ群落などの自然度の高い森林もサイトの北～西部に広く分布している。

アピール ポイント

有識者からご指導を頂きながら、従業員が自分たちの手で敷地内の豊かな自然環境とそこに生息する多様な生物の保全のために3つのテーマの取組みを実施している。また、敷地内の自然林は、2010年に実施した植生調査結果からミズナラ-シナノキ群落やトドマツ-ミズナラ群落など自然度の高い樹林の分布が確認されている。この自然林は試験場建設以降は大きく手を加えていないことや、現況の自然環境を尊重して人の手を加えない管理を継続していく。

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

南西側のまとまった樹林は、トドマツ、ミズナラ、シナノキ等で構成される自然度の高い樹林となっている。また、その流域の河川には、良好な水質の指標となるサクラマスの上流が確認されていることから、敷地内の樹林環境は調整サービス（水源涵養機能など）を有していると考えられる。また南西側の樹林に加え、草地や河川といった敷地内の自然環境を活かした観察会などを実施していることから、文化的サービス（レクリエーション）の提供の場として利用している。

【主な植生】

敷地内はテストコースの造成や管理などにより、シラカンバ二次林や牧草類を中心とした単調な人工草地となっている部分もあるが、西から南側はミズナラ-シナノキ群落などの自然植生が現在も多く残る。また、河川周辺ではオノエヤナギ群落やヨシ群落などの水辺環境に成立する植生がみられる。

【確認された主な動植物など】

2010・2020年の調査で確認された動植物の種数は計982種で主な動植物や分類群ごとの確認種数は以下のとおりとなっている。

哺乳類：エゾユキウサギ、エゾリス、エゾアカネズミ、エゾタヌキ、キタキツネ、エゾクロテン、エゾシカなど計10種、鳥類：マガモ、ハチクマ、オオジシギ、アオバト、アカゲラ、モズ、ノビタキ、ゴジュウカラなど計63種、爬虫類：シマヘビ、ジムグリの計2種
両生類：エゾサンショウウオ、ニホンアマガエル、エゾアカガエルの計3種、魚類：サクラマス、ヤチウグイ、フクドジョウ、ハナカジカなど計6種、昆虫類：オオルリボシヤンマ、ハネナガキリギリス、ハネナガフキバツタ、エゾハルゼミ、ハネナシサシガメ、ゲンゴロウモドキ、ミヤマクワガタ、エゾアザミテントウ、ケズネアカヤマアリ、ケブカスズメバチ、ゴマフアブ、クジャクチョウ、クスサンなど計551種、維管束植物：トドマツ、オニグルミ、バッコヤナギ、シラカンバ、ミズナラ、オオイタドリ、エゾノリュウキンカ、オクエゾサイシン、ハンゴンソウ、オオバナノエンレイソウ、ヨシ、クマイザサ、ミズバショウなど計347種



写真の説明：エゾサンショウウオの産卵場所



写真の説明：エゾサンショウウオ

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

樹林や草地、河川といった多様な環境が敷地内に見られる。南西側のまとまった樹林は、トドマツ、ミズナラ、シナノキ等で構成される自然度の高い樹林で、林内には重要な種であるオクエゾサイシンやカタクリが生育し、動物の重要な種も生息する自然環境である。また、周回路内側にもこうした自然性の高い樹林が所々に見られ、樹林性の動物にとって西側丘陵地から飛び石状に連続する重要な生息環境となっている。

【確認された希少種】

2010・2020年の調査で確認された希少な動植物は35種が確認されている（主に成体等の確認）。

哺乳類：エゾクロテン *Martes zibellina*（国・北：NT）などの計2種、鳥類：ハチクマ *Pernis ptilorhynchus*（国・北：NT）、オオジシギ *Gallinago hardwickii*（国・北：NT）、ヤマシギ *Scolopax rusticola*（北：N）、ホオアカ *Emberiza fucata*（北：NT）などの計7種、両生類：エゾサンショウウオ *Hynobius retardatus*（国：DD、北：N）の1種、魚類：サクラマス *Oncorhynchus masou masou*（国：NT、北：N）、ヤチウグイ *Rhynchocypris percnurus sachalinensis*（国・北：NT）、ハナカジカ *Cottus nozawae*（北：N）などの計4種、昆虫類：オオイトトンボ *Cercion sieboldii*（北：NT）、オオミススマシ *Dineutus orientalis*（国：NT）、キバネクロバエ *Mesembrina resplendens*（北：NT）、ヒメギフチョウ *Luehdorfia puziloi yessoensis*（国：NT）、ゴマシジミ *Maculinea teleius*（国：NT、北：N）、などの計11種、維管束植物：タヌキモ *Utricularia australis*（国・北：NT）、カタクリ *Erythronium japonicum*（北：N）などの計10種

希少種の選定基準

【国：環境省レッドリスト2020】 カテゴリー 準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)

【北：北海道レッドリスト2001、2015-2018】 カテゴリー 準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、留意種(N)



写真の説明：ヒメギフチョウ



写真の説明：カタクリ

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

周回路内外にみられるトドマツ、ミズナラ、シナノキ等で構成される自然度の高い樹林ではエゾサンショウウオの繁殖が確認され、人工草地や高茎草本群落のような草地環境ではオオジシギの飛翔が確認されている。また、敷地内を流れる天塩川水系の河川ではサクラマスの上上が確認され、良好な水質とともに下流域との連続性を伺い知ることができる。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

鳥類：オオジシギ

生活史：試験場に訪れる夏鳥で、繁殖期（5月から6月にかけて）に敷地内の草地環境でディスプレイフライトが確認されている。

両生類：エゾサンショウウオ

生活史：雪解けの間もない4月末ごろに、産卵のためエゾサンショウウオの成体が敷地内の水辺環境を訪れ、集団で産卵を行う。孵化した幼生は同じ水場を利用しているエゾアカガエルの幼生などを食べて成長し、8月～9月頃には上陸する。一部水温の低い繁殖場所では、孵化した当年に上陸しないもの（越冬幼生）も確認されている。

魚類：サクラマス

生活史：9月末から10月上旬にかけて敷地内の河川で遡上が確認されている。また、敷地内の河川で砂や礫を掘り返すような、繁殖と思われる様子も確認されている。



写真の説明：敷地内の草地環境で確認されたオオジシギ



写真の説明：敷地内の河川で確認されたサクラマス

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
<p><活動目的> 【豊かな自然環境とそこに生息する在来種の維持・外来種の駆除】を方針に3つの取り組みを実施している。それぞれの取組の目的については、①重要種の保全是、敷地内及び周辺地域において生息数の減少が懸念される重要種の保全を行うことを目的に、②外来種の駆除は、地域在来種を主体とした生態系維持することを目的に、③地域連携イベントは、前述の取り組みについて地域住民への理解促進とともに生物多様性に対する関心・意識向上を図ることを目的に活動を行っている。</p> <p><活動内容> ①重要種の保全：敷地内及び周辺地域において生息数の減少が懸念される重要種として、エゾサンショウウオの保全活動を実施している。また敷地内の生態系全体を見据えた保全活動のために、樹林環境と草地環境の指標としてエゾクロテンやエゾタヌキなどの中型哺乳類、草地環境の指標としてオオジシギ、河川環境の指標としてサクラマスのモニタリング調査を実施している。②外来種の駆除：地域在来種を主体とした生態系維持のため、敷地内の8ヶ所でアライグマの駆除活動を行い、また国道沿いのエリアではオオハンゴンソウの刈り倒しを行っている。その他にオオハンゴンソウの分布がまとまって生育が見られる場所では開花期にドローンによるモニタリング調査を実施している。③地域連携イベント：土別市立博物館と連携して、敷地内を活動の場とした地域住民参加型のイベントを定期的実施している。</p> <p><実施体制、計画の点検、見直し> トヨタ自動車（株）土別試験場や同社の先進技術統括部の活動担当職員が中心となって実施する。それぞれの活動内容については毎年の活動終了後に専門の有識者に報告を行い、助言を得る。本活動計画は、毎年の実施状況や調査結果を踏まえて毎年度末に見直しを行う。</p>	<p>【モニタリング対象】 中型哺乳類、オオジシギ、エゾサンショウウオ、サクラマスを対象とする。</p> <p>【モニタリング場所】 中型哺乳類：サイト内の8箇所（アライグマの駆除活動と同地点）、オオジシギ：サイト内の3箇所、エゾサンショウウオ：サイト内の14箇所、サクラマス：サイト内の1河川</p> <p>【モニタリング手法】 中型哺乳類：定点カメラ調査、オオジシギ：音声レコーダーによる調査、エゾサンショウウオ：卵囊のカウント、幼生の捕獲調査、サクラマス：定点カメラによる調査</p> <p>【モニタリングの実施時期及び頻度】 モニタリング調査は、トヨタ自動車（株）土別試験場の活動担当職員が中心となって実施する。中型哺乳類：4月～11月、オオジシギ：5月～6月、エゾサンショウウオ：5月～6月（3回／年）、サクラマス：9月中旬～10月中旬</p> <p>【モニタリング実施体制】 モニタリング調査は、トヨタ自動車（株）土別試験場の活動担当職員が中心となって実施する。取得したデータの整理や結果のまとめは同社の先進技術統括部の活動担当職員を行う。専門の有識者（中村太士先生、佐鹿万里子先生、徳田龍弘先生、本部哲矢先生）へ活動の報告を行い、調査結果や保全といった実施内容について指導を依頼している。</p>